



Title	先生と言語を巡る思い
Author(s)	上村, 秀樹
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

先生と言語を巡る思い

2017 年度大阪・サンパウロ姉妹都市交流事業招聘人材

上村秀樹

この度はご定年おめでとうございます。

林田先生と初めてお会いしたのは、2018 年、私がお大阪・サンパウロ姉妹都市協会から招聘された日本の春がまだ浅い頃でした。私の旅の目的は 50 年にも及ぶ両市の交流を更に深めるためのイベントの一つでした。

大阪に到着して、まず最初に、大阪市役所を表敬訪問して正式な挨拶をして、その後、大学や企業施設を多く訪問することになりました。あの時を振り返ると、日本でまずポルトガル語を聞くということはまず期待していなくて、ブラジルで勉強してきた日本語が通じるかどうか心配していたのを覚えています。しかし、初めて会った歓迎会の挨拶に林田先生は、Eu também entendo português!（私もポルトガル語をはなします!）と親切にポルトガル語で話を始められて、びっくりしました。ポルトガル語のほかに、文化にも造詣が深く、ポルトガル特有のタイルの写真を見せながら、熱く語られ、まさか世界の反対側にもこんなにブラジルに深く感心を持つ人物と出会えるとは……今でも深く印象に残っています。

言語学者で当たり前のように、その国の文化を理解しているのを拝見し、先生がブラジルの各地を訪れた時のお話を聞きますと、かえってブラジルから来た私が自覚せず、知らなかった、別のブラジルを知ることができました。恥ずかしながら、面積の広い大陸ですが、サンパウロから出る機会があまりなく、こんなに熱く語っている日本人がおられて、本当に感心しました。また、何か反省しなければならないような気持ちになりました。帰国したら、もう少し関心を持ってブラジル各地を歩こうと約束しました。

その他、訪問の合間にブラジル日系人の話が話題になったことが記憶にあります。家族構成や日本語を覚えてきた経緯、こういう話に、先生は大変興味を持っていると感じました。多分そこで分かったのは、ブラジル日系人の歴史はあまり日本では語られていなくて、知る人ぞ知るという感じで、ひょっとすると、ブラジルには世界最大の日系コミュニティが存在していることすら、知らない日本人が多いのだと思いました。

その中で、先生が日系人の話に大変興味を持っていただいていた、本当にうれしく思いました。そして、コロニア(日系人コミュニティ)の「造語」の話をした時も、私の取るに足らない話で盛り上がりました。多言語・多文化に育つ日系人は、ポルトガル語と日本語を混ぜた独特の単語を造り出すのです。例えば、部屋の電気を消すとき、ポルトガル語で Apaga a luz!(ライトを消す!)を Apaga denki!〈アパガ[Apaga:ポルトガル語 apagar の命令形:消す]+denki[電気]!〉, テーブルクロス(ポルトガル語:Toalha de mesa)は, Mesa kake〈メザ[mesa:ポルトガル語:テーブル]+kake(クロス)〉などと表現し、ポルトガル語の語順(文法)を守る場合もあれば、日本語の語順(文法)を守る場合もあります。私も、最近まで日本語の語順の「メザカケ」をポルトガル語の語順のテーブルクロス(toalha de mesa)と認識していなかったこともあり、初めて知ったときは少しショックを受けました。その時も、何らかの理由で、話の途中で「長蛇の列」を「ちょうだのれつ」ではなく「ながへびのれつ」と私は言って、先生は関西弁で「それちゃうよ、『ちょうだ』って読む!」と訂正してくれました。再会の度に、そのエピソードを思い出します。多分一生「長蛇の列」はもう間違えないと思いますが、やはり漢字は難しいと改めて思いました。悔しいと思いながら、今後も先生のライブラリーに私の間違ったコトバンクが増えないよう頑張りたいと思っています。

そのエピソードを振り返りながら、先生が日本語・ポルトガル語の双方向言語運用能力をはかる「適正テスト」を紹介され、実際に受検した時(2019年8月23日)、私はもう一つ違う視点で日本語を眺めることができました。もともと、日本語は家庭内で、最初に触れ合った言語で、その後、学校に通うようになって、ポルトガル語と自然に触れ合うことになりました。しかし、ブラジルで生活しているのですから、ポルトガル語の方を磨き、日常生活ではポルトガル語の影響力は大きいです。日本語は子供の頃から16歳まで日本語学校に通い、おかげ様で読み書きを覚えましたが、卒業後は殆ど独学で継続し、日本に行きたいという強い憧れの気持ちがなかったら、きっと使う話し言葉も、漢字の書き方も忘れてしまったでしょう。

そしていざ「適正テスト」に挑戦すると、微妙に両言語の差が浮き彫りになりました。語彙力の差と同時に適切な言葉を選ぶスピード、それぞれの言語を別々に使えば、要領よく行きますが、今回は非常に集中力が必要でした。鉛筆で漢字を書く時も、ヒアリングで聞くスピードに追い付けず、すらすらとローマ字で書く方が効率的でした。「私はポルトガル語と同じレベルで日本語を上手くならなければ、正確な意味を伝えることができないのではな

いか?」と受検からずいぶん経った今でも考えさせる体験でした。もちろん、ポルトガル語も完璧とは言えませんが、日本語は長年の経験で培ってきた言語能力なので「学習言語としての日本語」に限定すれば、相当なレベルにあると自信があります。しかし、今回の試験のように両方を使う場合、経験・学習で覚えた量ではなく、両方を上手く使いこなせるか、コミュニケーションする相手に伝わりやすい表現で伝えることが必要であると分かりました。すなわち、ハード・スキルをある程度使いこなしながらも、ソフト・スキルに置き換えて両言語を活用する方が有効ではないかと感じました。

この「適正テスト」でもう一つ感じたのは、例えば、本来はお互いが違う言語で意思疎通の成立に欠かせない、その一つの要因は言語の壁を乗り越えることではないでしょうか。旅行など、簡単な日常の会話にはそれまで専門的な言葉(専門用語)は要求されませんが、経済や政治・文化などが国境を越えている今の世界では外国人労働者の移住・移動が激しく頻繁な状況になり、様々な言語が社会の中で、飛び交うように日々の生活を彩るようになりました。そうした刺激的な状況は、社会に大きな恩恵をもたらす一方で、同時に様々な問題が生まれました。カルチャーショックで馴染めない、社会に溶け込めない、外国から来た人々。ブラジルでも似たような問題もあり、巨大な人種の坩堝に世界中の民族が混ぜ合わさっていることを特徴とする国でありながら、その一方で、互いに差別意識・感情をむき出しにするような厳しい段階を潜り抜けてきた歴史を持っています。少し大げさですが、この「適正テスト」はそうした壁を乗り越えることができる一步を示すものではないかと思っています。言語・文化を通じて、お互いを理解できる人材を育成し、その架け橋の役割を担って、両国を繋いでいくことは、やがて地域コミュニティー交流の促進にも繋がり、社会全体にもよい影響をもたらします。この「適正テスト」は、その道筋が正しい方向を示していると確信します。

この文章を書きながら、締めくくりの良い言葉がなかなか見つからないのです。私は、単純に「お疲れさまでした」ではなく、「これからもよろしくお願いします」と、そのように締めくくりたい気分になってきました。先生もこれからご健康で益々ご活躍されることを祈っております。



2018 年 3 月 28 日（平成 30 年）『大阪大学醫學伝習百年史』（1869 - 1969 年，2010 年刊）を大阪大学病院から受け取り，サンパウロ・サンタクルス病院表敬訪問に際して刊本を寄贈した当日撮影した写真。

一枚目の写真左側奥レオネル・フェルナンデス病院長と右側奥は山野ジュリオ技術院長，『伝習史』を持つ左は西国幸四郎医師(病院脳外科部門長)と右は筆者。

二枚目の写真では筆者の右側がドミンゴス・フェルナンデス院長，左側が西国医師。この日は『伝習史』贈呈に際し，石川レナト理事長や院長先生などにご挨拶し，病院施設内を視察。創立当初から日本の病院組織などと連携し，現在も密接な関係が続き，例えば HICARE(放射線被曝者医療国際協力推進協議会：1991 年発足)と協定を結び，130 人の日系人被爆者の治療を行ったり，入院患者には JICA から派遣された栄養士の指導の下，日本食を提供，そして医療現場水準の発展維持のため，医療分野の学术交流（筑波大学，大阪大学，九州大学などとサンタクルス病院との交流を促進し，医療シンポジウムなどを開催）も積極的に行う病院の様々な学術・臨床研究活動に私は大変感銘を受けました。

その他，意識改善を目指す 5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)の訓練を受けた看護師の患者の診療録（カルテ）の工夫も興味深いでした。これまで始終整理棚に置き間違えていたカルテ・ファイルは大幅なタイムロスを引き，それを解決したのは「富士山」の絵柄文様でした。いったん，棚に正しく並べて，各ファイルの背表紙に「富士山」の絵柄文様が全体として浮かび上がるように，テープを端から端まで貼っていき，それを以って，各ファイルの固定位置が決まります。絵柄文様は，病院内に日本をイメージさせる雰囲気醸し出される効果だ

けではなく、間違った位置にカルテを戻してしまうと、富士山の絵柄文様が崩れ、間違った位置に戻されたことにすぐ気づきます。この整理整頓作業を見ていて、さすが、クリエイティブだなあと素朴に感心し、脳裏に焼き付きました。最新技術を取り入れながら、日系人が運営するこの病院は、今後新しい可能性を展望し、未来に向けて新しい道を開拓するその姿をこれからも期待したいと思います。そしてその病院の歴史に深く結ばれている日本とブラジルの緊密な関係が末永く続くよう心から願っております。